オー・ハッピー・デイ！

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 北, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24777

オー・ハッピー・デイ！

大学宗教主任　北　博

ペトロの手紙一　一章八～九節

8あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。9それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

ペトロの手紙一　二章二四～二五節

24そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。25あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

最近、キリスト教の教えにはどうも本質的に意志的なものが多く含まれているのではないか、と思うことがあります。例えば聖書で語られる「信仰、希望、愛」がそうです。聖書で語られる愛は、決して誰かが自分に好意的だから愛するとか、何となく感じのいい人だから愛するとかではないでしょう。逆に「汝の敵を愛せよ」といった逆説的とも取れる厳しい教えも語られます。信仰についても、誰かが信頼に値する人柄だから信じてみよう、というのとは少し違うように思います。言わば、何か弁証法的な激しさを含んだ一貫した精神のあり方とでも言いましょうか。希望について言えば、例えば予測によると見通しが明るそうだから希望が持てるとかいったことではなくて、むしろ絶望的な状況に立ち向かって行く中で語られる言葉ではないかと思います。かつて世界教会協議会のある会議で希望について、「キリスト者の希望とはあらゆる運命論に対する抵抗運動である」と宣言されたことがありましたが、やはりこれも世間一般に用いられる意味とはかなり違います。

つまり、通常の会話でこれらの言葉が出て来る場合、一般的に意味するのは「反応」としての心の動き、他者や外部からの何らかの刺戟に対して受動的に向かう心の方向性なのですが、聖書の言う「信仰、希望、愛」とはその逆で、他者や外部に対する一貫した姿勢、ある精神のありよ

うに貫かれたものなのではないかと考えています。

同じように、聖書の言う「喜び」も、外部から入ってきた何か心地よいこと、例えば人に褒められたとか日が差してそよ風が心地よいとかいったことに対する「反応」としての喜びではなく、苦しいこと悲しいことの多々ある人生を根底から支え、様々な困難に立ち向かって行く勇気を与える、ある確信に根差した「喜び」なのではないかと思います。

もちろん、それでも悲しいこともあれば苦しいこともあります。また、腹立たしく思うことも日常生活の中では多々あります。私は別に、それらを乗り越える強靭な精神力について語っているわけではありません。実は後で申し上げますが、私は今日、あることで深い悲しみの中にあります。それ自体は、どうしようもありませんし、別に隠すべきものでも否定すべきものでもないと思っています。今日私が申し上げようとしているのは、そのような悲しみや苦しみの支えとなる喜びについてです。

本日御一緒に賛美しました『讃美歌』五一六番の原詩の作詞者は、フィリップ・ドッドリッジという十八世紀前半に生きた人です。皆さんが目にしている日本語の歌詞はかなりの意訳で、特に折り返し部分の「きみにむつぶこの日ぞ嬉しき、うれしきこの日や」はあまり原詩の意図を忠実に伝えているとは言い難いので、以下この部分を直訳してみます。

―イエスが私の罪を洗い去った幸せな日、幸せな日。彼（イエス）は私に、よく見て祈り、日々喜んで生きることを教えてくれた。イエスが私の罪を洗い去った幸せな日、幸せな日。

『讃美歌』五一六番の他に、『聖歌』二三一番にも同じ賛美歌が収録されていますが、『聖歌』の方が原詩により忠実な訳詞になっています。参考のため、この訳詞のうち一節と折り返しの部分だけお知らせしておきます。

―うれしきこの日よこころをさだめて「すくいのきみよ」とみ子をばあおぎぬ

うれしうれしこの日ぞうれしきイエスきみこの身をすくわせたまえり

うれしうれしこの日ぞうれしき

こうして改めて歌詞を読んでみると、この賛美歌は洗礼式の際にみんなで賛美してもいいんじゃないかという気がします。

ところでその後二十世紀後半になって、エドウィン・ホーキンズという人物がこの賛美歌の折り返し部分に別のメロディーを付けて歌ったところ、大ヒットしました。これがゴスペルの名曲「オー・ハッピー・デイ」です。かなり前に聞いた話ですが、歌手の白鳥英美子さんが「アメイジング・グレイス」を聴いて感動し、ある人にこの歌を歌いたいと打ち明けたところ、その人は「この歌の歌詞には非常に重い意味が含まれているので、この歌を歌うには相当な覚悟が必要だ」と

注意を促したそうです。

その意味では、「オー・ハッピー・デイ」の内容もやはり相当重いですね。「今日は天気だ、気分は爽やか、幸せな日だ」と言っているわけでは決してなく、「イエス・キリストによって贖われ、罪が洗い去られたから幸せな日だ」と言っているわけですから。この歌詞の背後にどのような人生のドラマがあったのだろうと想像すると、気軽に歌えなくなりそうです。

本日の聖書の個所に即して言うならば、「イエス・キリストが私の罪のために十字架を背負ってくださったために、私は罪赦され生きることができるようになった。だから喜びに満ち溢れている」、ということです。そしてそれが、「オー・ハッピー・デイ」で歌われている喜びでもあるのです。

先程も申しましたが、それでも悲しい時は悲しいのです。それは気持ちを押し殺したり、そのことで自分を責めたりするような性質のことでもないと思います。今日私が取り上げた聖書の個所で言っている「喜び」とは、むしろそのような様々な感情を受け止め、慰め、癒して、力づけてくれる喜び、つまり生きる力の源、生きるという営みの根底となるような喜びです。

実は今日（十一月十四日）、私は動物病院から電話を受け、点滴を受けていた十一歳五カ月になる愛犬のさくらの容体が急変し、亡くなったという知らせを受けました。私はつい先程動物病院に駆けつけてさくらの死を見届け、遺体を自宅に連れて帰り、それからこちら（泉男子寄宿舎）

に向かいました。この悲しみを乗り越えられるという自信はあまりありません。私はそれほど意志強固なタイプの人間ではないのです。でも、これも含めてすべて主のご計画のうちにあることを思い、悲しみを受け入れ、ゆっくり一歩ずつ歩きながら生きて行こうと思っています。